

## 武理恵『仏語入門』(明治7) —明治初期のフランス語学習書をめぐる考察—

加藤 詔 士 (法学部教授)

### 1. 明治日本のフランス語学習書

#### 1) フランス語学習の始まり

わが国のフランス語学習は、1808(文化5)年2月に始まる。前年にロシアから開国・通商を要求されたさいに、幕府は国際外交用語としてフランス語の重要性を認識したことから、長崎の通詞にフランス語の学習を命じ、オランダ商館長H. ドーフ(Hendrick Doeff, 1777-1835)を教師にしてフランス語学習が始められた。

その後、村上英俊(1811-1890)による先駆的なフランス語研究と『三語便覧』(1854)『洋学捷徑-仏英訓弁』(1855)などの刊行、パリ外国宣教会(Société des Missions Etrangères de Paris)から派遣された神父たちによるフランス語教育などをへて、幕末維新时期にはフランスからお雇い教師が招聘されフランス語学習が本格化するようになった。J. B. A. アリヴェ(Jean Baptiste Arthur Arrivet, 1846-1902), G. H. ブスケ(George Hilaire Bousquet, 1846-1937), V. G. アペール(Victor George Appert, 1850-1934), P. F. フーク(Prosper Fortuné Fouque, 1843-1906)等の諸氏である。かれらは諸種の学校に雇い入れられ、フランス語あるいは仏学の教育を担当した<sup>1)</sup>。

#### 2) 明治初期のフランス語学習書

フランス語の学習が開始されるとともに、その学習書、研究書、辞書の刊行も企画され、日本人学習者にとって必携の書となった。当初は単なる単語集かその解説版であったが、会話書、文法書、読本、辞書などが現れはじめた。

明治期のフランス語学習書として、たとえば、東京外国語学校編『維新前後外国語図書目録』(昭和5)では、字典9点、文典4点、入門書10点、読本4点があげられている。西堀昭『日仏文化交流史の研究-日本の近代化とフランス人-』(1981, 1988増補版)には、村上英俊『三語便覧』に始まる、長大な「フランス語研究書目-幕末・明治・大正・昭和-(辞書・参考書・教科書)」が付されている。宮永孝『日本洋学史-葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容-』(2004)には、「幕末・明治のフランス語学書」として、幕末から明治20(1887)年までの、文法書・単語集・読本・会話書50点、辞典11点が掲げられている<sup>2)</sup>。

本稿は、以上のような先行研究の成果と動向にかんがみ、武理恵(今村有隣訳)『仏語入門』(明治7)という一書に注目し、その教育史的意義をめぐって考察する。同書は上記の先行研究ではまったく顧みられておらず、また明治初期のフランス語学習書一覧のなかにも掲出されていないけれども、実はその後の学習書に大きな影響を与えていることを具

体的に分析する。

## 2. 武理恵『仏語入門』の構成と内容

### 1) 体裁

『仏語入門』は明治7（1874）年10月刊行という、きわめて早期のフランス語学習書である。同書は世上からおおた失われ、今では稀覯書となっている<sup>(3)</sup>。管見のかぎり、国立国会図書館関西館のほかには伝存を聞かない。

その国立国会図書館架蔵本<sup>(4)</sup>によると、同書は打ち抜き綴じ。縦18センチ、横12センチという中型本である。「クリーム色または薄黄色に近い色合い」<sup>(5)</sup>の表紙、標題紙、フランス語の「前文 (PRÉFACE)」ならびに日本語の「緒言」に続いて、本文が始まる。本

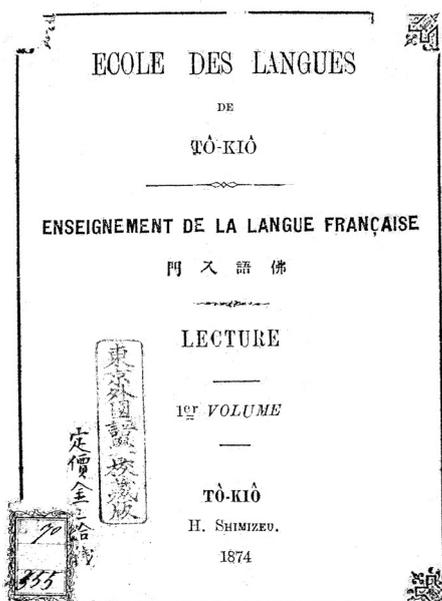
文は全99頁。巻末に正誤一覧表が4頁、配されている。目次ならびに刊記・奥附に欠ける。

### 2) 表紙と標題紙

表紙ならびに標題紙は資料①および資料②に示すとおりである。「ECOLE DES LANGUES DE TÔ-KIÔ」という表記があることから、本書は東京外国語学校の学習書であったと考えられる。実際、明治14年の同校「仏語学科教科細目」には、第一年第一期（9月11日から翌年2月25日）の「読法」ならびに「暗記」の教科において、『仏語入門』が教科書として掲出されている<sup>(6)</sup>。

また、表紙ならびに標題紙に捺された受入ならびに納付の印記から、本書は東京外国語学校の架蔵本であったこと、それが、明治14

資料① 武理恵『仏語入門』の表紙



資料② 武理恵『仏語入門』の標題紙



年8月15日付で東京教育博物館に贈付されたことが知れる。本書がいま国立国会図書館に架蔵されているのは、東京教育博物館の図書室は、明治18年6月2日、東京図書館に吸収合併され、さらに東京図書館は帝国図書館（明治30年）、国会図書館（昭和22年）、国立国会図書館（昭和24年）と継承されたことによる<sup>7)</sup>。

### 3) 前文と緒言

本書には、フランス語の「前文 (PRÉFACE)」に続いて、日本語の「緒言」がある。多少の出入りや省略はあるが、両者の内容はおおむね同趣旨である。ただし、「緒言」はかならずしもフランス語の「前文」の翻訳版ではない。

具体的にみると、「緒言」では本書編輯の趣旨ならびに素材について述べられている。すなわち、洋学の学習は、入門時より「其単語等ノ和訳ニ通シ又彼文体ノ特異ナルヲ熟知センコトヲ要ス」という趣意から、本書が編輯された。素材については、「務テ小説教門等ノ言語ヲ除キ文典算術地理等ノ肝要ナル學術ノ初歩ニ渉ルモノ」を採取し、これを「専ラ理ニ循テ易ヨリ難ニ至ルノ順序ヲ立テ」て編輯するとある。

注目されるのは、識語の主の表記である。フランス語の「前文」では「D<sup>r</sup> P. Mourier. A. Ima-Moura.」、日本語の「緒言」では「武理恵識 今村有隣訳」とあることから、武理恵は Mourier の漢字名であること、しかも武理恵の手になる識語を今村有隣が翻訳したことが示されている。

なお、フランス語の「前文」には「文部大臣閣下の許可を得て出版」したとあるが、日本語の「緒言」にはそれに相応する訳語は認められない。

### 4) 構成と内容

『仏語入門』は第一篇と第二篇の2篇から構成されている。

目次を備えていないので、本文中の小節の題目を順に示すと、下掲の資料③のようになる。

同書の内容には、いくつかの特色がみられる。第一は編集方針であって、同書は前出の緒言に記されているように、初心者に「単語等ノ和訳ニ通シ又彼文体ノ特異ナルヲ熟知センコト」を願って編集された。また、具体的な教材については、「小学ヲ経タル少年輩ノ為ニ編述スル者ナレハ従前ノ方法ニ拘泥セス専ラ理ニ循テ易ヨリ難ニ至ルノ順序ヲ立テ且ツ務テ小説教門等ノ言語ヲ除キ文典算術地理等ノ肝要ナル學術ノ初歩ニ渉ルモノ而已ヲ採取」している。

第二は、構成と内容であって、本書は発音と単語の面からフランス語を「易ヨリ難ニ至ルノ順序ヲ立テ」て説明している。本文第一頁は、下記のように始まっている。

「Le langage se compose de sons et

d'articulations. 音声ヲ以テ語ヲ成ス

Les sons et les articulations sont représentés

par des signes qu'on appelle lettres.

文字ヲ以テ此音声ヲ顯示ス」

具体的に見ると、第一篇は27章、第二篇は15章から編成されており、たとえば、第一篇

資料③ 武理恵（今村有隣訳）『仏語入門』（1874）の構成

第一篇		
I	第一章：音字 声字 亜刺伯数 原字 大角字 小角字 羅馬数字	1 頁
II	第二章：伊呂波 濁音	9
III	第三章：正字号，音符 句点	11
IV	第四章：単音 音字 単音表 鼻音	12
V	第五章：一字ノ単声 節音 綴字 一音ノ詞 二音ノ詞 三四音ノ詞	16
VI	第六章：単声 転置音 章句	24
VII	第七章：一字ノ復声	30
VIII	第八章：Articulations doubles	30
IX	第九章：復声及鼻音字	33
X	第十章：二字ノ単音 同音ノ字	35
XI	第十一章：Son simple	36
XII	第十二章：一字ニシテ種々ノ音アルモノ	37
XIII	第十三章：合音	39
XIV	第十四章：Modification de l'E 音符ナシト雖次ニ音字アルヲ以テ発音スベキ e	40
XV	第十五章：Articulations simples	41
XVI	第十六章：正字法中殊ニ注意スベキ文字	43
XVII	第十七章：二字ノ単声	44
XVIII	第十八章：二字ノ単音	45
XIX	第十九章：三字ノ単声	47
XX	第二十章：Articulations simples	48
XXI	第二十一章：ç	49

XXII	第二十二章：多字ノ単音	50
XXIII	第二十三章：両音字ノ中間ニアル所ノ s ハ z ノ如ク 發音スベシ	51
XXIV	第二十四章：s ノ両音比較	52
XXV	第二十五章：二字ノ単音 語尾ノ ez erハéノ如キ音ヲ有ス	54
XXVI	第二十六章：正字号 山形音符	56
XXVII	第二十七章：Phrases graduées	58
第二篇 發音シ難キモノ		
I	Phrasesb	63
II	二字以上ノ合音	69
III	第三章 ——	70
IV	第四章 前ノ音字ニ感及セツシテ重複セル文字	71
V	第五章 ——	72
VI	第六章 次ニ音字を有スル i ノ字ノ前ニ来レルヲ以テ Sノ如ク發音スベキ t	75
VII	第七章 Signes Orthographiques	76
VIII	第八章 Signes Orthographiques (suite)	77
IX	第九章 合併シタル文字	79
X	第十章 一字ノ復音	80
XI	第十一章 三字ノ復音	81
XII	第十二章 ——	82
XIII	第十三章 Exceptions et difficultés	84
XIV	第十四章 Exceptions et difficultés	85
XV	第十五章 Exceptions et difficultés	87
	Lectures gradaées	89
	TEMPS 時令	
	UNIVERS 宇宙	
	TERRE 地	
	天地間万物ノ三門	92
	ANIMAUX 動物	
	VÉGÉTAUX 植物	
	MINÉRAUX 鉱物	
	HIÉRARCHIE 位階	95
	LOCUTIONS 談話中平常誤ル所ノ熟語	96
APPENDICE		
	ERRATA 正誤	

は順に一字ノ単音，一音ノ詞，二音ノ詞，二字ノ単声，二字ノ単音，三字ノ単声，多字ノ単音などの章から成り，第二篇は日本人にとり「発音シ難キモノ」について，二字以上ノ合音，一字ノ復音，三字ノ復音などという章が順にならんでいる。いずれも，単語の発音ならびにその単語を用いた例文とその日本語訳から成っている。

「両音字ノ中間ニアル所ノ s ハ z ノ如ク発音スベシ」「s ノ両音比較」「語尾ノ er ez ハ é ノ如キ音ヲ有ス」などの章を設けた単語の発音の仕方，さらには小文の解釈の章もまた設けられている。巻末には，時令，宇宙，地，動物，植物，鉱物，位階，談話中平常誤ル所ノ熟語から成る単語集が付され，のべ10頁におよぶ。

要するに，本書では発音ならびに単語の学習が重視されており，日本語で近似した音の単語ごとに集めて掲出している。そのなかでも，発音の説明中心の学習書であり，いわば発音指南書であるような特色が認められる。

第三に，例文が数多く含まれていることが目立つ。合計106例を数える。小文の解釈の章（第一篇第27章，第二篇第1章）だけでなく，各章で掲出された単語を使用した例文が第一篇は各章に1ないし2例，第二篇は2ないし9例，採録されている。とくに第二篇「発音シ難キモノ」はのべ63例にのぼり，例文集といってよいほどの内容である。

採録された例文には，いくつかの特色が認められる。その一は，文例は「文典算術地理等ノ肝要ナル學術ノ初歩ニ渉ルモノ」が採集されたと緒言にあるけれども，とりわけ「自

然」や「植物」にかかわる文例が多い。

たとえば，「文典」「算術」「地理」にかかわる例文としては，下記のような例文が採録されている<sup>(8)</sup>。

- Le langage se compose de sons et d'articulations (音声ヲ以テ語ヲ成ス)
- Les sons et les articulations sont représentés par des signes qu'on appelle lettres (文学ヲ以テ此音声ヲ顯示ス) .
- Attention, chers enfants; nous allons faire une addition, puis une soustraction, demain nous ferons des fractions et des multiplications (意ヲ留メヨコレ可愛キ童子我等ハ先ツ加算次ニ減法ヲナシ明日ニ至テ分数及乗算ヲナサン)

その一方，「自然」や「植物」にかかわる例文は数々あり，たとえば次の通りである<sup>(9)</sup>。

- Le ver à soie mange la feuille du mûrier (蚕ハ桑ノ葉ヲ食ス)
- Le vent du nord souffle avec une grande violence (北風烈シク吹来ル)
- La tonnelle est couverte de lianes et de vignes (此樹棚ハ藤ト葡萄トニテ蔽ハレリ)
- Le tonnerre gronde; on voit briller les éclairs (雷鳴シ又電光ヲ見ル)

その二は，日本にかかわる例文もある（「Voyez ce beau paon du Japon, 此美ナル日本孔雀ヲ監視セヨ」など）が，フランスを素材にした数多くの例文が採録されている<sup>(10)</sup>。

- Papa va revenir de Paris; il apportera une magnifique porcelaine pour mon frère Arthur (父ハ近々巴里ヨリ華麗ナル陶器

ヲ持帰リテ我兄弟ノアルチュルニ贈ラン)

○ La Saône a monté jusqu'an maximum de l'étiage (ソーヌ河ノ水満チテ水標ノ最大数マデ登レリ)

○ Nous irons avec mon oncle de Caen visiter les chefs-d'oeuvre du museum de Laon (予レカノ伯父ト共ニラノ博物館ニ至リ名器ヲ縦観セン)

その三に、例文のなかにはいくつかの文法事項が使われている。たとえば、近接未来、複合過去、単純未来、関係代名詞 (qui)、慣用表現 (il y a)、命令法、現在分詞、ジェロンディフ (現在分詞の特殊用法)、複数形容詞の用法、非人称構文、使役、代名動詞、補語人称代名詞、受動態、最上級、半過去、知覚動詞などである。また、単純未来を用いた例文が比較的多く、逆に過去時制を用いた例文は少ないこと、今日の初級フランス語教科書で扱われる近接過去、関係代名詞 (que, dont, où, le quel)、疑問詞 (qui, que, quand, pourquoi, comment, où)、中性代名詞 (le, en, y)、比較級、大過去、条件法、接続法などは扱われていない、などという特色も認められる<sup>(11)</sup>。

### 3. 著者・武理恵と訳者・今村有隣

#### 1) 武理恵

##### (1)

『仏語入門』の著者・武理恵は、お雇いフランス人教師 P. J. ムリエ (Pierre Joseph Mourier, 1827 - 不詳) と考えられる。

その理由の第一は、前出のように、同書の

前文 (フランス語) に、

「Dr P. Mourier. A. Ima-Moura. Tô-kiô, octobre 1874」

とあり、また緒言では「武理恵識 今村有隣訳」とあること、しかもユネスコ東アジア文化センター作成の『お雇い外国人名鑑』<sup>(12)</sup>にみるかぎり、当時「P. ムリエ博士 (Dr P. Mourier)」なる人物は P. J. ムリエ以外には認められないからである。

第二に、訳者の「A. Ima-Moura」は東京外国語学校仏語学教諭でムリエの同僚の今村有隣 (1845 - 1924) であったことである。『東京外国語学校官員並生徒一覽 明治七年三月』によれば、今村は仏語学二等教諭、ムリエは仏語学外国教諭4名のうちの一人であった。ちなみに、今村は仏語学下等第五級を担当し、同クラスでは会話 (週に6回, 1回一時間)、書取 (3回)、書方 (6回)、読方 (6回)、文法 (4回)、暗誦 (2回)、算術 (3回) が教えられた。ムリエは下等第一級を担当し、同クラスでは会話 (週3回)、書取 (3回)、読方 (6回)、暗誦 (1回)、算術 (4回)、文典 (2回)、和訳 (2回)、練則 (3回)、地理 (2回)、作文 (2回)、題答 (2回) が教えられていた<sup>(13)</sup>。

第三に、ムリエは、後述のように、フランス人でありながら日本語に精通していたのだから、日本人のフランス語学習者むけに『仏語入門』を著述することは十分考えられる。

以上から、武理恵 (今村有隣訳) 『仏語入門』はお雇いフランス人教師 P. J. ムリエの著作であり、武理恵はそのムリエの漢字名と考えられる。訳者は東京外国語学校の同僚

でフランス語教師の今村有隣と目される。

(2)

一般にお雇い教師には素性ないし経歴が判然としない者が少なくないが、そのなか、ムリエの履歴ないし学歴、来日の時期ならびに滞日期間、来日の事情と経緯はほぼ判明している。すでに別稿<sup>(14)</sup>で詳述したので、概述するとおおよそ下記のとおりである。

まず、ムリエは1827(文政10)年5月6日、フランスのドローム県トリニアン(Taullignan, Drôme)の生まれである。モンペリエ大学医学部に学び、1850(嘉永3)年には医学博士号を取得した。『充血試論(Essai Sur Les Fluxions: Thèse)』という博士論文をまとめている。妻の郷里ヴァランス(Valance)で医者を開業したあと、パリに出た。パリでは、1863(文久3)年に東洋語学校(Ecole Impériale des Langues Orientales)で始められたL. P. ロニー(Léon-Louis-Lucien Prunel de Rosny, 1837-1914)の日本語講座を受講している。その前年には、徳川幕府が派遣した竹内保徳遣欧使節一行がパリを訪問しナポレオン三世に謁見したことで、「一種の日本ブームが起こっていた」。

ロニーの日本語講座に学んだあと、ムリエはフランス文部省あてに、1864(元治元)年4月1日付で日本派遣を申請した。「提出書類には、日本の医学、農業、工業、とりわけ養蚕に関する研究計画を列挙した」。5月10日付で派遣許可があり、「日本資料を採集して本国に送る」ことが課されていた。

来日したのは、1864年8月3日。上海経由で横浜に来着した。「フランス文部省派遣で

あるが、自己負担であった」というから、来日当初、確かな雇用主はいなかった。したがって、横浜居留地に居住し、医者を開業した。当時の商工人名録には、「ドクター・ムリエ、横浜居留地一七一番にて開業医」とある。現在の神奈川県庁分庁舎あたりの地である。

横浜居留地における開業医ムリエの評判は広く聞こえたようで、たとえば旧尾張藩士の宇都宮三郎(1834-1902)が診察を請うてきた。蘭方医・佐藤泰然(1804-1872)の推薦であった。この宇都宮三郎の斡旋で名古屋藩に雇い入れられたことから、ムリエにお雇い教師への道が開かれることになる。ただし、医学の教師でなく仏学の教師としての赴任であった。

名古屋藩の洋学校には、明治4(1871)年8月1日に「学校教師」として雇い入れられ、仏学を担当した。明治6年9月21日に満期雇止になると、今度は7年3月5日より一ケ年、官立の外国語専門教育機関である東京外国語学校の仏語学教師に、7年11月1日から司法省の明法寮にそれぞれ雇い継がれ、13年4月9日に至るまで仏語学教師、法律顧問、通訳・訳官を務めている。

離日は明治13(1880)年4月14日だから、滞日期間は、一時帰国をはさんで、15年ほどにも及んだ。

(3)

ムリエの経歴のうち、L. P. ロニーの日本語講座を受講したことがとくに注目される。日本語をよく理解しただけでなく、日本趣味の人でもあったことから、お雇い教師のなかでも特異な足跡ないし事績を残すことになる

からである。

第一に、ムリエの日本通ならびに日本趣味は、早くも名古屋藩洋学校時代から世間の耳目を集めており、『愛知新聞』『名古屋新聞』などの地元紙に何度も取りあげられている。赴任を歓迎する宴では、もてなす静あるいは柳という芸妓にむかい、「芸妓ノ静ナルハ宜シカラズ」「柳トハ幽霊ニテモ出サフナル名ナリ」などといって改名させたこと、国学者の植松茂岳（1794-1876）から古今和歌集を学んだこと、高袴・割羽織・大小を着用したこと、日本文典および「仏語を日本語に対訳」した著述があること、などである。「和語ニ通スルノミナラス和ノ俗事顛末ノコト迄能了解」した、とも報じられている。

東京外国語学校教師時代にも、たとえば明治7年7月9日の『官許横浜毎日新聞』には、ムリエの日本語通が詳細に報じられている。その報道のなかで「教導自勉の余力に仏和対語の撰に従事せり」ということが特筆されている<sup>(15)</sup>。この「仏和対語の撰」こそ『仏語入門』（明治7）と考えられる。

第二に、日本語に精通していただけに、お雇い教師の主務以外に、各地で実に多彩な活動をなすことができた。名古屋藩の洋学校、文部省の東京外国語学校、司法省の明法寮とお雇い継がれ、お雇い教師としての任務を果たすかたわら、数々の活動を展開し、各地にいくつかの足跡を残している。なかでも、横浜居留地における気象観測、日本養蚕技術の調査研究とフランス語への翻訳紹介、日本書籍や日本地図の収集とフランスへの翻訳紹介、そして本稿で考察するフランス語学習書の著

作が注目される<sup>(16)</sup>。

このうち、日本養蚕技術の調査研究ならびにフランス語への翻訳紹介はそれぞれ二書についておこなわれた。まず日本養蚕技術については、中島ていぞう・文右衛門『奥州本場養蚕手引』（慶応2）の翻訳を試みパリの『帝国動物馴化学会紀要』（1867）に掲載された。清水金左衛門『養蚕教弘録』（弘化4）の翻訳は『帝国動物馴化学会紀要』（1868）に掲載されるとともに、同名の図書としてパリの出版社から刊行された<sup>(17)</sup>。また、日本地図の収集とフランスへの翻訳紹介については、『富士見十三州輿地全図』（1843）ならびに『官版実測日本地図』（1867）を収集し、地名その他の日本語情報をフランス語に翻訳し、しかも解題を添えてフランス文部省に送付したのであった<sup>(18)</sup>。

15年ほどの滞日中、このような日本関連資料を収集・調査しこれをフランスに送付するという日仏交流推進活動をしたり、フランス語の普及に携わっていたのである。このような点において、ムリエはお雇い教師のなかでも、とくに異彩を放つ存在であった。

## 2) 今村有隣

### (1)

訳者の今村有隣<sup>ありちか</sup>（1845-1924）は加賀藩の出身。藩校壮猶館ならびに大坂の適塾で学んだのち、横浜に出て、文久2（1862）年から「仏国公使館附書記官カシオン氏等ニ就キ六年間仏学ヲ修」めた。明治2（1869）年には東京の「箕作麟祥氏ニ就キ三年間仏学ヲ修」め、さらに同年8月1日には「大学南校ニ入

り三ヶ月間仏学ヲ修」めた<sup>(19)</sup>。

それ以後、今村は「その生涯の大部分をフランス語教育に捧げた」。フランス語の教師として、またフランス語の文法書ないし参考書の著述を通して、明治期のフランス語教育者を代表する一人として実績を残している<sup>(20)</sup>。

具体的にみると、まず第一に、明治2年11月7日に大学少得業生、明治3年12月26日に大学少助教にそれぞれ任ぜられて以来、明治41年9月10日に退職するまでの30有余年、文部教官としていくつかの学校のフランス語教師として、また校長として終始した。東京外国語学校、東京商業学校、高等商業学校、東京大学予備門（後の第一高等中学校、第一高等学校）の諸学校である。この間、東京外国語学校には明治8年6月8日二等教諭に任ぜられ、翌9年の9月5日には一等教諭に、10年8月27日には訓導に任ぜられている<sup>(21)</sup>。

第二のフランス語文法書ないし参考書については、主たる成果として二書ある。最初の成果が明治15年10月刊行の『仏語啓蒙』である。3年後の明治18年12月には『改訂仏語啓蒙』が、さらに明治29年8月には『改訂増補仏語啓蒙』が刊行されている。このうち、『改訂仏語啓蒙』ならびに『改訂増補仏語啓蒙』には、表紙ならびに標題紙に「仏国アリヴェ<sup>ママ</sup>一<sup>ママ</sup>閔」とあり、お雇いフランス人教師 J. B. A. アリヴェが校閲したことが特筆される。アリヴェは、当時は司法省法学校教師であったが、明治29年9月までは東京外国語学校で今村有隣と同僚のフランス語教師であった<sup>(22)</sup>。

今村は明治32年になると、もう一つ、『対

釈応用仏蘭西文法、附作文例及習慣句』という文法書を博文館から刊行した。「明治時代の総合文法書として『対釈応用仏蘭西文法』の占める位置は高く、それは日本人によって編まれたもので最も水準の高い信頼のおけるものである」とか、「今日のこの種の文法書とあまり変わらないくらいである」とか称えられている<sup>(23)</sup>。本書も版を重ね、明治35年に訂正増補版が出ている<sup>(24)</sup>。

## (2)

以上のような長年にわたるフランス学教師ならびに先駆的なフランス語学習書の著述等の功労は、晩年になり、賞与、叙位、叙勲をもって顕彰された。

まず、賞与については、明治34年3月27日、第一高等学校教授26名の一人として、「本務外ニ於テ高等学校教科細目及授業法ノ取調ニ従事シ格別勉勵ニ付」、金40円の賞与を受けた<sup>(25)</sup>。

叙位については、明治14年7月に東京外国語学校教諭に任ぜられて以来「高等官在職満十年以上ニシテ勤勞不サ候」につき、明治39年10月に、位一級を進めて、正五位から従四位に叙せられた<sup>(26)</sup>。

叙勲については、大正13（1924）年9月4日、勲三等に叙し瑞宝章を授与することの裁可書が内閣総理大臣から賞勲局総裁に送達されたのだが、今村は裁可された同27日に死去した。ちなみに、文部大臣岡田良平から内閣総理大臣加藤高明に送られた上奏書を示すと、資料④の通りである<sup>(27)</sup>。「三十有七年間仏語教師トシテ又校長トシテ終始」したこと、ならびに「明治仏語学書ノ先駆」を著述したこ

とによる「教育上ノ功績洵ニ顕著ナリ」と称えられている。

生前の明治33年3月31日には、フランス政府（教育及美術大臣）から「オフィシエ・ダカデミー（教育功労勲章）」が贈られたことも特筆される<sup>(28)</sup>。

なお、東京の染井霊園にある石碑『今村先生墓道之碑』には今村の生涯の経歴が記録され、上記の履歴のほかに、「六年奉命出差欧州」すなわち明治6年にオーストリアのウィーン万国博覧会の三級事務官として赴いたこと、「門士大夫又義建書庫以誌師恩名曰今村文庫」すなわち門人が設けた今村文庫と称する書庫があるということも記されている<sup>(29)</sup>。

#### 4. 武理恵『仏語入門』の教育史的意義

##### 1) お雇い教師P. J. ムリエの著作

###### (1)

『仏語入門』は、第一に、明治7（1873）

年10月刊行という、きわめて早期のフランス語学習書であること、それも、お雇い教師による著作であることが特筆される。

明治はじめのこの時期、ことに明治4年から6年にかけてフランス語関係の書物の出版が開花したのだが、そのほとんどが日本人による著作であった<sup>(30)</sup>。そのなか、本書はお雇いフランス人教師P. J. ムリエの作品であったことが何よりも注目される。

同書を著すことができたのも、ムリエは日本語に精通し日本趣味の人であったことが注目される。採用された例文のなかには、日本での生活のなかで採集したであろう例文が見られる。

一般にお雇い教師というと、主たる任務は三つあった。教育の実践、学校の経営、政策の提言であるが、実はこのほかに、当初は予期しなかった成果があった。教育実践の基礎となる専門の研究、本務の余暇を利用した日本研究、日本での見聞や経験をもとにした帰国後の日本紹介、である。

#### 資料④ 今村有隣への叙勲の上奏書

元第一高等学校長従四位勲四等今村有隣  
叙勲三等授瑞宝章

右者明治三年大学少助教二任セラレ爾来文部  
少助教全中助教東京外国語学校教諭高等商  
業学校教授第一高等中学校教授第一高等学校  
長等二歴任シ明治三十九年九月退官更ニ全校  
講師トナリ全四十一年九月退職迄三十有七年間  
仏語教師トシテ又校長トシテ終始シ其間専心育  
英ノ事ニ従ヒ後学ノ誘掖指導ヲ怠ラス殊ニ全人  
ハ仏語学ノ先覚ニシテ明治十五年「仏語啓蒙」  
ヲ著シ又全三十二年「対釈応用仏蘭西文法」ヲ  
著セリ之レ実ニ明治仏語学書ノ先驅ニシテ其  
後同種ノ書世ニ出スルモノ多ク此書ニ基ケリ  
以テ後学ノ指導学習ニ資スル処頗ル大ナリ而シ  
テ全人ノ教ヲ受ケ現時仏学ヲ以テ世ニ立テルモノ  
甚多ク本邦仏学ノ現時ノ盛況ヲ見ルハ蓋シ全  
人ノ力与テ大ナリト謂フヘク教育上ノ功績洵ニ顕  
著ナリトス然ルニ全人ハ八十歳ノ高齢ニ達シ又客  
年来病ヲ得目下危篤ニ陥リ命且夕ニ追レリ  
希クハ此際全人ノ功績ヲ録セラレ特ニ頭書ノ通  
り勲等進叙ノ榮ヲ与ヘラレンコトヲ茲ニ謹テ奏ス  
大正十三年九月四日

文部大臣岡田良平

ムリエの場合もそうであって、元治元(1864)年8月3日に来日してから明治13(1880)年4月までの滞在中、既述のように、名古屋藩洋学校、東京外国語学校、司法省法学校のお雇い教師として、仏学あるいはフランス語の教師、法律顧問、通訳・訳官という主務を果たしたほかに、実に多彩な活動をしている。気象観測、日本養蚕技術の調査研究と翻訳紹介、日本書籍や日本地図の収集とフランスへの紹介、フランス語学習書の著作、などである。

『官許横浜毎日新聞』(明治7年7月9日)において特筆されたように、東京外国語学校の仏語学教師時代に、「教導自勉の余力に仏和対語の撰に従事」した<sup>(31)</sup>成果として本書を上梓したものである。

## (2)

お雇い教師のうち、教育実践の基礎をなす著作であれ専門分野の研究書であれ、著述をなす者は珍しくない<sup>(32)</sup>が、日本人学習者むけに自国語の学習書を、それも日本語をふんだんに使用した説明を含んだ学習書を著した者は少ない。

フランス語学習書についても、J. B. A. アリヴェ、P. F. フークなどのお雇いフランス人教師が日本人学習者むけにフランス語学習書を著している。そのうち、1878(明治11)年9月から1886(明治19)年9月まで東京外国語学校、司法省法学校、東京法学校のフランス語教師であったJ. B. A. アリヴェは、『仏語学簡易ノ訳文論(Choix de Textes gradués avec des notes explicatives pour faciliter aux étudiants

japonais; L'étude de la langue française)』(1886)、あるいは『和仏会話捷徑(Leçons de conversation rédigées spécialement pour les étudiants japonais)』(1886)などを著しているが、それとて1886(明治19)年になってからのことである<sup>(33)</sup>。しかも、両書ともほとんどフランス語での説明から成っているし、邦訳出版された訳ではない。

それに対して、ムリエはフランス語教育の実践という主務を果たしながら、その主務に直結する『仏語入門』を、日本語による説明も添えて著述したこと、しかも同書は日本語に翻訳されて活用された、ということが特筆される。

なお、ムリエは、東京外国語学校のお雇い教師時代に、同校の教科課程の改正に寄与したことも特記される。すなわち、明治7年に修業年限が4年から6年(教育課程は上下二等・各等六級)に改変されるのにもない、他のお雇いドイツ語教師ならびにお雇い英語教師と3名で委嘱を受け、検討のうえ、「文学」科目を設定した。明治8年の教則には上等語学第3年第一期に「文学」「文学歴史」が登場している。外国文化の理解には外国の「歴史」および「地理」とともに「文学」の学習が不可欠であるとの趣旨からであった<sup>(34)</sup>。

## 2) 今村有隣編『仏語啓蒙』の種本

### (1)

武理恵『仏語入門』が注目される第二の理由は、後述のように、訳者の今村有隣が同書と類似した『仏語啓蒙』を編纂したこ

と、しかもその『仏語啓蒙』は改訂版、改訂増補版と版を重ねて広く普及をみたことである。『仏語入門』がどれほど歓迎されたのか、これを示す記録史料は目下のところ見出せないだけに、『仏語入門』ときわめて類似した『仏語啓蒙』が版を重ねたことは注目に値する。

『仏語啓蒙』と『仏語入門』の類似性を具体的にみるために、両書を比較考察してみると、まず第一に、『仏語啓蒙』におけるフランス語の「前文 (PRÉFACE)」ならびに日本語の「引」では、『仏語入門』と類似した趣旨ならびに内容がみられる。すなわち、本書編纂の趣旨として入門者なら「言語ノ発音及和訳ニ通曉スヘキ」こと、また「文意ヲ了解シ以テ能ク彼我ノ文体ニ異同アルヲ詳悉センコト」を謳い、教材としては「洋書中頗ル饒多ナル小説宗教等ニ渉ルモノヲ除キ主トシテ日用緊要ノ言語及博物地理算術等ノ用語ヲ選取ス」ることにした。『仏語入門』と同じような路線の上に立って、編集されたのである。

第二に、構成と内容も、同一もしくは類似するところがすこぶる多い。『仏語啓蒙』は『仏語入門』と同じく目次を備えていないので、本文中の小節の題目を整理して順に示すと、資料⑤のようになる。第二篇の最終部分で若干の工夫がみられるが、前出の資料③『仏語入門』の構成と比較するだけで、両著の類似性は一目瞭然である。

第三に、単語の語彙ならび例文についても、同一もしくは類似の用例が収められている。巻末の単語集も、時令、宇宙、地、

動物、植物、鉱物、位階、平常談話中誤り易キ熟語の部までは同じ語彙を採録している。ただし、これに地学ならびに算術に関する語彙が、それぞれ9頁ならびに4頁にわたって新規に加えられている。

例文についてみると、本書で採録された例文は108例を数えるが、このうち『仏語入門』と同じ例文を数えあげると、実に96例にのぼっている。しかも、例文に添えられた日本語訳も同じである。『仏語入門』に収められた例文は、既述のように106例であったのだから、両著の関係が密接であることが裏づけられる。もっとも例文のなかの固有名詞の変更 (la petite Kikou を la petite Marie に<sup>(35)</sup>など)、配列順の入れ替え (2カ所)<sup>(36)</sup>、さらには新規の例文との差し替え (6例)<sup>(37)</sup>、あらたな例文の新規追加 (7例)<sup>(38)</sup> などという工夫・改善はみられるけれども、『仏語啓蒙』は『仏語入門』に大いに依拠して編集されたことがわかる。ちなみに、両書の類似性を物語る具体的な紙面の一例を示すと、資料⑥の通りである。

第四に、発音の説明についても類似性が認められる。両書とも特徴ある読み方を示す発音については、フランス語もしくは日仏両語による説明文を特設している。『仏語入門』では6件、『仏語啓蒙』では7件を数える。ただし、『仏語啓蒙』においては、新規に1件の説明文が特設されただけでなく、『仏語入門』に比べると日本語説明文が新設されたり、簡潔になったり、詳細になったりという改良がみられる<sup>(39)</sup>こと

## 資料⑤ 今村有隣編『仏語啓蒙』(1882)の構成

第一篇		
I	第一章：—— 原字 大字 小字 ゴット体 第一音字 第二音字	1 頁
II	第二章：伊呂波 濁音	9
III	第三章：正書法記号 句点	11
IV	第四章：単音 音字 多字の単音 合一音字 単音表 鼻音	12
V	第五章：一字ノ単声 綴字 節音 一音ノ詞 二音ノ詞 三四音ノ詞	16
VI	第六章：単声 転置音 章句	22
VII	第七章：一字ノ復声	28
VIII	第八章：Articulations doubles 復声	28
IX	第九章：復声及鼻音字	31
X	第十章：二字ノ単音 同音ノ字	33
XI	第十一章：Son simple	34
XII	第十二章：一字ノ復音	35
XIII	第十三章：一字ノ種々ノ用法	36
XIV	第十四章：合音	38
XV	第十五章：Modification de l'E Eハ音符ナシト雖次ノ音字ト相關スルトキハ有音 ノモノトナル	40
XVI	第十六章：Articulations simples, Signes équivalents	41
XVII	第十七章：正書法中殊ニ注意スベキ文字	42
XVII	第十八章：二字ノ単声	44
XIX	第十九章：二字ノ単音	45
XX	第二十章：三字ノ単音	47
XXI	第二十一章：Articulations simples, Signes équivalents ph=f	48

XXII	第二十二章：sハ両音字ノ中間ニ在ル所ハzノ如キ音ヲ有ス	49
XXIII	第二十三章：sノ両音比較	50
XXIV	第二十四章：二字ノ単音	52
XXV	第二十五章：正書法記号，開音符，略字号，別音号	54
XXVI	第二十六章：化音ノILL	58
XXVII	第二十七章：Phrases graduées	60
第二篇 難音		
I	第一章 Phrases	65
II	第二章 二字以上ノ合音	71
III	第三章 ——	72
IV	第四章 前ノ音字ニ感及セズシテ重複セル文字	73
V	第五章	74
VI	第六章 tiハ音字ノ前ニアリテハ屢々siノ音アルモノトス 然レトモtノ前ニs 或ハxノ在ルトキハ尋常ノ音ニ止ル	77
VII	第七章 合併シタル文字	79
VIII	第八章 三字ノ単音	80
IX	第九章 phrases	81
X	——	83
XI	Excéptions et difficultés	83
Lectures gradaées		87
	TEMPS 時令	
	UNIVERS 宇宙	
	TERRE 地	
天地間万物ノ三門		90
	1 ANIMAUX 動物	
	2 VÉGÉTAUX 植物	
	3 MINÉRAUX 鉱物	
	HIÉRARCHIE 位階	93
	LOCUTIONS 平常談話中誤リ易キ熟語	94
	Termes géographiques 地学用語	97
	Termes arithmétique 算術用語	106
	Appendice	110

資料⑥『仏語入門』と『仏語啓蒙』の紙面（一部）

○武理恵（今村有隣訳）『仏語入門』

28

EXERCICE (suite).

fat	高慢 <small>ナ</small>	dot	持參金 <small>嫁</small>
pat te	脚	cap sulc	火門
bat tue	打 <small>テ</small>	nip pe	所持ノ衣服

Epellation et syllabation.

dor mir	眠 <small>ル</small>	mar di	火曜日
ap por té	持来 <small>リ</small>	mor sure	囁
ro bus te	壯健 <small>ナ</small>	ma ti nal	早起 <small>シ</small>
ad mi ré	感心 <small>シ</small>	bot te	長靴
nap pe	飯蓋	op por tu ni té	好機會
nat te	藩	but te	脚架
dé gar nir	具 <small>ヲ</small> 取除 <small>ス</small>	par ve nir	成就 <small>ス</small>
al té ré	海 <small>シ</small>	la pos te	郵便
ca ta rac te	大瀑布	pac te	契約
ac tif	徳屬 <small>ナ</small>	fac ture	買物ノ價書
le ca rac tère	性質		

○今村有隣訳『仏語啓蒙』

26

Syllabes inverses. (suite).

Epellation et syllabation.

pat te	脚	cap su le	雷電
bat te rie	砲臺 <small>又</small> 砲列	mo tif	緣 <small>ノ</small> 故
tis su	織物	sub til	種 <small>々</small>
dor mir	眠 <small>ル</small>	mar di	火曜日
ap por té	持来 <small>リ</small>	mor su re	囁
ro bus te	壯健 <small>ナ</small>	ma ti nal	早起 <small>シ</small>
ad mi ré	感心 <small>シ</small>	bot te	長靴
nap pe	飯蓋	op por tu ni té	好機會
nat te	藩	but te	脚架
dé gar nir	具 <small>ヲ</small> 取除 <small>ス</small>	par ve nir	成就 <small>ス</small>
al té ré	海 <small>シ</small>	pos te	郵便
ca ta rac te	大瀑布	pac te	契約
ac tif	徳屬 <small>ナ</small>	fac tu re	買物ノ價書
ca rac tère	性質		

が特筆される。

以上、要するに、『仏語啓蒙』と『仏語入門』は驚くほど類似している。緊密の関係にあった。多少の出入はあるが、引、構成と章の見出し、内容のいずれの点でも、同一もしくは類似するところがすこぶる多い。第二篇の最終部分で若干の工夫がみられるが、学習の内容と順序はほぼ同じといってよい。今村有隣は『仏語入門』を翻訳した体験を生かして『仏語啓蒙』を編んだと考えられる。

なお、武理恵『仏語入門』はフランス語の前文に「文部大臣閣下の許可を得て出版」とあり、表紙ならびに標題紙に「東京のH.

シミズ (H. Shimizeu)』という出版社(者)名も付記されている。これに対して、今村有隣編『仏語啓蒙』はそのような著作権事項は、初版の場合、認められない<sup>(40)</sup>。自家版であったと考えられる。(ただし、改訂版(明治18)ならびに改訂増補版(明治29)になると、刊記、売捌所、発行者、印刷者、印刷所、定価など、詳細な出版事項が記された<sup>(41)</sup>。)

5. まとめ

(1)

武理恵（今村有隣訳）『仏語入門』は、明治日本のフランス語学習書の一書として

注目される。

第一に、明治7年10月という早い時期に刊行された、希少の学習書である。稀覯本のためか、管見のかぎり、明治日本のフランス語学習書として言及されることは少ないように思われる。

第二に、著者の武理恵とはお雇いフランス人教師P. J. ムリエの漢字名であり、したがって本書はお雇い教師による著作であることが特筆される。当時、ムリエは東京外国語学校の仏語学外国教師の一人であり、仏語学下等第一級を担当していた。同校に雇い入れられる前は名古屋藩洋学校の仏学教師であったのだから、それまでのお雇い教師としての体験等にもとづいてまとめられたのであろう。

本書は、お雇い教師という主務の余力としての成果であるという点においても注目に値する。ムリエは、フランス語の教師としてだけでなく、フランス語学習書の執筆を通して、明治初期日本のフランス語教育に寄与したのである。お雇い教師の主務を果たしながら学習書ないし研究書を著した者は、それほど多くない。お雇いフランス語教師としてはM. ド・カション、J. B. A. アリヴェ、P. F. フークが知られている<sup>(42)</sup>が、ムリエもその一人に加えられるべきである。

ムリエが『仏語入門』を著述できたのも、日本語能力に恵まれていたことが注目される。「概して、お雇い外国人たちは日本語に馴染まなかった」<sup>(43)</sup>ののだが、そのなかムリエは、日本語を駆使して数々の活動をな

すことができた。来日前にパリでL. P. ロニーの日本語講座に学んでいたこともあって、来日後早くから日本養蚕技術の調査研究とフランス語への翻訳紹介、日本書籍や日本地図の収集とフランスへの翻訳紹介などにも、精力的にたずさわっていた。

第三に、『仏語入門』の訳者今村有隣は東京外国語学校で同僚の仏語学教師であったこと、その今村が『仏語入門』と内容と構成がきわめて類似した『仏語啓蒙』（明治15年10月）を著わすと、同書は3年後の明治18年12月に改訂版が、明治29年1月には改訂増補版と版を重ね、世間の歓迎を得たことが特筆される。『仏語入門』の内容は、今村有隣の手を経て広く普及したのである。

## (2)

本稿では、明治初期日本のフランス語学習書の歴史における武理恵（今村有隣訳）『仏語入門』（明治7）の意義に着目し、同書の構成と内容、著者武理恵ならびに訳者今村有隣の人物像、同書と今村有隣編『仏語啓蒙』との異同の3点について、できるだけ具体的に考察した。

ただし、明治初期日本におけるフランス語学習書の歴史上の意義をめぐる考察というなら、もう一つ検討すべき課題がある。『仏語啓蒙』との関係いかんということだけでなく、『仏語入門』が刊行される以前における、その他の類書との関係をめぐる考察である。ムリエは日本語に精通していただに依拠すべき類書を活用したのか、あるいは参考になる書物や先例の手助けの

ないまま、みずからの創意工夫をこらして考え出すしかなかったのかどうか、という主題である。先行する類書との異同を丹念に比較考察するというこの作業は、明治初

期フランス語学習書における『仏語入門』の位置づけについての理解にとって欠かすことができない。残された課題とする。

### [注]

- 1) 富田仁『フランス語事始-村上英俊とその時代-』日本放送出版協会, 1983, 10-15頁。富田仁『長崎フランス物語』(白水社, 1988)第二章「北からの脅威でフランス語事始め」, とくに46-47頁。西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』駿河台出版社, 1988増訂版, 481-483頁, その他。
- 2) 東京外国語学校編『維新前後外国語図書目録』東京外国語学校, 昭和5, 31-35頁。西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』同上, 821-841頁。宮永孝『日本洋学史-葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容-』三修社, 2004, 362-368頁。
- 3) 各種のデータベースを見ても、管見のかぎり(2012年9月1日現在), 国立国会図書館に1本架蔵されているだけである。
- 4) 国立国会図書館の所蔵番号は「特49-242」。筆者は同館のデジタルデータを活用した。
- 5) 表紙の色は「経年劣化による退色, 汚れなどにより刊行当時の色彩は不明」であるが, 現在の状態は「クリーム色または淡黄色に近い色合い」。「綴じについては打ち抜き綴じが上中下段の三箇所施されており, それぞれの綴じ糸の端を, ポール紙の裏側と, それに貼り合わせる紙の間の差し込む形で, 表紙と中身がつながられて」いる。国立国会図書館利用者サービス部のご教示による(平成24年11月22日付)。記して多謝する。
- 6) 無名氏「松籟」, 東京外国語学校校友会『校友会雑誌』明治39年5月, 98-99頁(東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史 資料編一-独立百周年(建学百二十六年)記念-』東京外国語大学, 2001, 746頁に再録)。東京外国語大学学術情報サービス係(加藤氏)のご教示による。記して多謝する。
- 7) 国立国会図書館編『国立国会図書館三十年史』国立国会図書館, 昭和54, 14頁, 23頁。
- 8) 武理恵(今村有隣編)『仏語入門』H. Shimizu, 1874, 1頁, 75-76頁。
- 9) 同上, 60頁, 68頁, 73頁。
- 10) 同上, 59頁, 88頁。  
ムリエは日本語に精通し, 滞日中, 実に多彩な日仏交流推進活動に関与していた割には, 『仏語入門』に採録された日本関連の例文は少ないように思われる。
- 11) 本件については, 中尾浩先生(愛知大学教授)のご教示を得た。記して多謝する。
- 12) 「お雇い外国人名鑑」, ユネスコ東アジア文化センター編『資料御雇外国人』小学館, 1975, 201-493頁所収。
- 13) 『東京外国語学校官員並生徒一覧 明治七年三月』東京外国語学校, 昭和5, 2丁, 4丁, 付録6丁, 付録8丁。
- 14) 拙稿「名古屋藩洋学校お雇いフランス人教師P. J. ムリエ」, 加藤詔士・吉川卓治編『西洋世界と日本の近代化-教育文化交流史研究-』大学教育出版, 2010, 42-65頁所収。ほかに, 拙稿「お雇い仏人教師ムリエによる日本養蚕技術の紹介」(上)(下)『日本古書通信』第792号(1995年7月)13-14頁, 第793号(1995年8月)28-29頁, 拙稿「司法省お雇いフランス人教師P. J. ムリエ」(上)(下)『書齋の窓』No.453(1996年4月)59-68頁, No.454(1996年5月)55-63頁, も参照。  
以下の本項(2)における注記は, これらの拙稿と重複するので省略した。
- 15) 『官許横浜毎日新聞』明治7年7月9日, 2-3頁。
- 16) 拙稿「名古屋藩お雇いフランス人教師P. J. ムリエ-日仏交流の推進-」(中部教育学会第58回大会報告資料, 2009年6月27日)5-15頁, 参照。
- 17) 'Manuel de l'Éducation des Vers a Soie dans le Homba de Ô Shiou (Japon), par Nakadgima Teiôzo et Boun-Yé-Mon, Traduit par M. le docteur Mourier. (Séance du 18 janvier 1867)', *Bulletin de la Société Impériale*

- Zoologique d'Acclimatation*, 2<sup>e</sup> Série, Tome IV, 1867, pp.12-15.
- ‘Étude Complète de L'Éducation des Vers a Soie, Par M. Shimidzeu Kinzaimon, Traduit du Japonais par M. le docteur P. Mourier’, *Bulletin de la Société Impériale Zoologique D'Acclimatation*, 2<sup>e</sup> Série, Tome V, 1868, pp.1-47.
- Étude Complète de L'Éducation des Vers a Soie, Par M. Shimidzeu Kinzai mon. Traduit du Japon par M. le docteur P. Mourier*, Victor Masson et Fils, Paris, 1868. しみずたか『蚕都物語：蚕種家清水金左衛門のはるかな旅路』幻冬舎ルネッサンス, 2008, 31-43頁。
- 18) 船越守愚撰・秋山永年著『富士見十三州輿地全図』天保13(1842)。「Collection de Livres et de Manuscrits Japonais de feu le Dr. Mourier’, Maisonneuve, J., *Bibliothèque Japonaise de M. M. Léon Pagès et Dr. Mourier, Linguistique, Histoire, Géographie etc., du Japon et de l'Indo-Chine*, J. Maisonneuve, Paris, 1889, p.90, p.99. ドベルグ美那子「P. ムリエの日本地図手写本—フランス語訳『官板実測日本地図』—」, 有坂隆道編『日本洋学史の研究』VIII, 創元社, 1987, 35-65頁。
- 19) 「第一高等学校教授今村有隣仏国オフヒシエー, ダカデミー記章受領及佩用ノ件」『叙勲裁可書』明治三十三年・叙勲卷四・外国勲章受領及佩用ニ止(国立公文書館蔵)に添付の履歴書より。  
カシヨンとはM. ド・カシヨン(Mermet de Cachon, 1828-1871?)。箕作麟祥(1846-1897)は、慶応3(1867)年1月, 徳川昭武(1853-1910)のバリ万国博覧会参列に随行, 同4年2月に帰国。その後, 東京神田で家塾を開いた。西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』前出, 第六章1。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ, 2005, 654頁, 参照。
- 20) 西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』同上, 312頁。
- 21) 「第一高等学校教授今村有隣仏国オフヒシエー, ダカデミー記章受領及佩用ノ件」(前出)に添付の履歴書より。
- 22) 西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』前出, 311-312頁。
- 23) 同上, 313-314頁。富田仁・西堀昭『横須賀製鉄所の人びと—花ひらくフランス文化』有隣堂, 1983, 102頁。  
本書『対訳応用仏蘭西文法』(博物館, 明治32, 明治35訂正増補第二版)は「応用」と称してはいるが, おおむね基本的な内容から構成されている。今日のフランス語教育の水準からいえば, 接続法(本書では「漢説法」)あるいは単純過去(本書では「定過去」)まで含まれているけれども, 精選した内容をていねいに説明したスタンダードな内容から成っている。本件についても, 中尾浩先生(愛知大学教授)のご教示を得た。記して多謝する。
- 24) 同訂正増補版(明治35)では, 巻末に, 付録の部における「諸階級」(称号, 法官, 行政官, 陸軍官階, 海軍官階のフランス語表現)の追加(264-268頁), ならびに「仏語発音要覧」の新設(I-VI頁)がみられる。
- 25) 「第一高等学校教授今村有隣以下二十六名及同薬学博士下山順一郎以下二名賞与ノ件」『公文雑纂』明治三十四年・第三十四卷・文部省・農商務省一(国立公文書館蔵)所収。
- 26) 「元第一高等学校長今村有隣特旨叙位ノ件」『叙位裁可書』明治三十九年・叙位卷二十七(国立公文書館蔵)所収。
- 27) 「従四位勲四等今村有隣叙勲ノ件」『叙勲裁可書』大正十三年・叙勲卷四・内国人四止(国立公文書館蔵)所収。
- 28) 「第一高等学校教授今村有隣仏国オフヒシエー, ダカデミー記章受領及佩用ノ件」前出, 参照。
- 29) 碑文は, 今井一良「今村新斎は仏語学者今村有隣ならんか」『適塾』20号(1987年11月)80頁, および西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』前出, 315頁に紹介されている。同碑の位置は, 染井靈園(東京都豊島区駒込5丁目5番1号)の「一種(イ)2号7側」。
- 30) 宮永孝『日本洋学史—葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容—』前出, 362-364頁。
- 31) 『官許横浜毎日新聞』明治7年7月9日, 2-3頁, 前出。
- 32) 西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』(前出, 69-79頁, 105-109頁, 133-137頁, 475-478頁,

489-494頁ほか)には、G. E. B. F. ボアンナード (Gustave Emile Boissonade de Fontarabie, 1825-1910), G. H. ブスケ, V. G. アペール, P. F. フーク, J. B. A. アリヴェなどの著作が紹介されている。

「著作・記録に見る『お雇い外国人』の足跡」(東京大学編『学問のアルケオロジー』東京大学出版会, 1997, 417-428頁)には、東京大学お雇い教師13名の著作(研究書, 講義録, ハンドブックなど)が紹介されている。

- 33) 西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』同上, 第六章3。武内博編著『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』日外アソシエーツ, 1995, 14頁, 参照。
- 34) 『文部省第二年報』明治7(宣文堂書店, 昭和39, 復刻)付録418頁。『文部省第三年報 第一冊』明治8(宣文堂書店, 昭和39, 復刻)付録557-558頁。東京外国語学校編『東京外国語学校沿革』東京

外国語学校, 昭和7, 35頁。東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史-独立百周年(建学百二十六年)記念-』東京外国語大学, 1999, 559-560頁, 562頁, 1361頁。野中正孝編著『東京外国語学校史-外国語を学んだ人たち』不二出版, 2008, 46-47頁。

- 35) 武理恵(今村有隣訳)『仏語入門』前出, 64頁。今村有隣編『仏語啓蒙』今村有隣, 1882, 66頁。
- 36) 武理恵(今村有隣訳)『仏語入門』同上, 65-66頁, 75-76頁。今村有隣編『仏語啓蒙』同上, 67-68頁, 77-78頁。
- 37) 武理恵(今村有隣訳)『仏語入門』同上, 1頁, 40頁, 61頁, 69頁, 77頁。今村有隣編『仏語啓蒙』同上, 1頁, 39頁, 63頁, 71頁, 79頁。
- 38) 今村有隣編『仏語啓蒙』同上, 56頁, 57頁, 64頁, 77-78頁。

39) 発音の説明についての対比は、次の通り。

項 目	『仏語入門』	『仏語啓蒙』	『仏語啓蒙』における改良点
Emploi différent d'un même signe	37頁	36頁	日本語説明文の新設
Modification de l'E	40	40	簡潔な日本語説明文に
signes équivalents	51	49	詳細な日本語説明文に
représenté par deux lettres	54	52	異同なし
Exercices gradués sur les lettres nulles.	63	65	日本語説明文の新設
T se prononçant S	75	77	詳細な日本語説明文に
S, suivie de ce, ci, ou ey, ne se prononce pas.	-	83	日仏両語の説明文の新設

40) 初版の奥附は下記の通りである。

「 版 権 免 許  
東京府平民  
編輯兼出版人 今 村 有 隣  
本郷区龍岡町二十二番地」

41) 改訂版(明治18)の奥附は下記の通り。

「明治十五年十月廿一日 版權免許  
全 年 全 月 出 版  
明治十八年十二月 改訂再版  
東京都平民

編輯兼出版人 今村有鄰  
本郷区龍岡町二十二番地  
売 捌 所 川俣喜代松  
本郷区龍岡町二十二番地

改訂増補版（明治29）になると、

「明治十五年十月二十一日 版 権 免 許  
全 年 全 月 二 十 一 日 初 版 出 版  
明治十八年十二月全 日 改 訂 二 版 出 版 正 価 金 四 拾 銭  
明治廿九年九月十 五 日 改 訂 増 補 三 版 印 刷  
全 年 全 月 二 十 一 日 全 發 行  
編 纂 者 今 村 有 隣  
東京本郷駒込  
曙町十六番地  
發 行 者 浅 岡 徑 義  
東京小石川新諏訪  
町十七番地寄留  
印 刷 者 斎 藤 章 達  
東京日本橋区濱町  
三丁目三番地  
印 刷 所 東京印刷株式会社  
東京日本橋区  
兜町二番地 』

- 42) 「日本に来た幕末から明治中期にかけてのフランス語教育者のなかでも、・・・教育、著作と活躍したのはメルメ・カション、プロスベル・フォルテユネ・フークとこのアリヴェのほかにはいない」（西堀昭『増訂版 日仏文化交流史の研究』前出，494頁）。
- 43) 新堀通也編『知日家の誕生』東信堂，1986，74頁。

